

面には、数条の沈線文(凹線文)を一単位として巡らせるものである。c類は、口縁部を内傾したままで口唇部は丸みをもっておさめ、口唇部には斜位の刻目を施すものである。d類は、口縁部の端部を外方に拡張し、広い平坦な口唇部をつくる。その平坦な口唇部には、へら描きの曲線文を描くものもある(吹上町教委1990)。

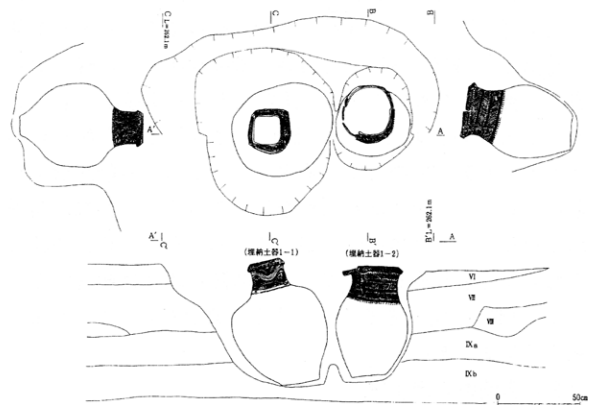
前畑遺跡では、縄文時代早期の数個体の石坂式土器と柵ノ原式土器を除けばほとんどは平栴式土器である。平栴式土器の中に、有文と無文の壺形土器が存在する。

有文の壺形土器は、口縁部は内傾し、口縁部の上端に粘土帯を貼付して蒲鉾状に肥厚させ、さらにすぼまった形を呈する。器形はほぼ類似するが、文様の組み合わせが若干異なる。口縁部の肥厚帯に横位あるいは弧状の凹線文を数条巡らせ、その上下端に刻目を施す。肥厚帯の下は斜位の数条の凹線文を鋸歯状に交互に施文し、凹線文の交点には刺突文を施すものや、刺突文を施した突帯文を縦位に貼付しているもある。口縁部の外面に平栴式土器特有の結節縄文が施文されるものもある。肥厚帯を若干口縁部の側面に輪積み貼付する手法であり、肥厚部分とその下位には縄文を施文する。無文の壺形土器も存在し注目された(鹿県教委1990)。

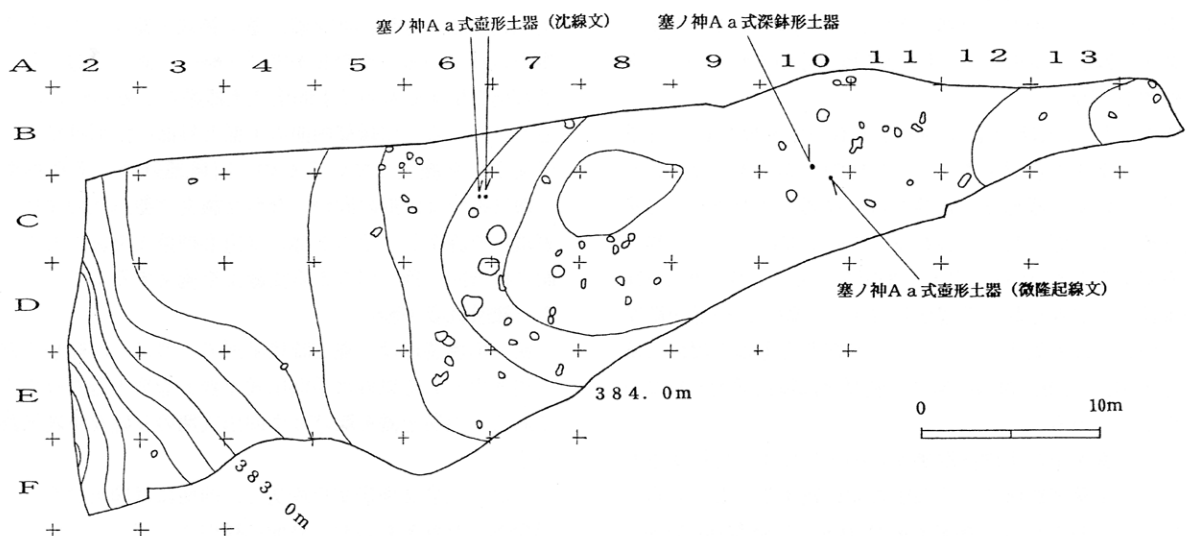
別府(石踊)遺跡は1979年に報告された遺跡で、最も早い段階に壺形土器が発見された遺跡である。もちろん、壺形土器という呼称はみられないが、報告書は「一略一文様は小さな刻みを施す細隆起突帯をめぐらすものである。Ⅵ類土器は今までに型式名のついていないものであるが、この種の土器は塞ノ神式土器、平栴式土器等に伴って出土している。一略一 今後の研究によりこれらの土器については時期、型式設定の必要があると思われる。」と記載し、新型式であることを示唆している(志布志町教委1979)。

石坂上遺跡は、河口貞徳によって1989年に「形式不明の土器」の一つとして発表されたものである。報告によると「石坂上遺跡第3層出土の土器である。石坂式と同時期でかなり古い時期のものといえる。内傾する器形で、篋刻みした微隆帯を密接して廻らすものである。塞ノ神式土器・平栴式土器に微隆帯をもつものがみられるが、器形が異なっている。今のところまったく系統不明の土器である」と記載されている。その後、塚ノ越遺跡からこれと同類の口縁部形態が出土し、柵ノ原式(塞ノ神Aa式)土器の壺形土器に該当することが判明したものである(河口1989)。

上野原遺跡では、天道ヶ尾式土器から平栴式土器の早期後葉の前中期(報告者は4段階に細分)の土器型式に多量の壺形土器が伴出している。その中に、11基12個(壺形土器は11個)の土器の埋納遺構が発見されている。そして、天道ヶ尾式土器期の埋納土器が5個、平栴A・B式土器期が4個、平栴C式土器期が3個と3時期に区分して報告さ



第2図 上野原遺跡の壺形土器出土状態
〔原図=鹿県教委2000より〕



第3図 城ヶ尾遺跡の壺形土器出土配置〔原図=児玉1998より〕